デーリー東北新聞社提供

デーリー東北
2023年（令和5年）11月6日（月曜日）（6）

刺し子コレクションを八戸へ

菱刺しの古作写真集の製作

川守田礼子
八戸工業大感性デザイン学部准教授

かわもりた・れいこ　1967年、旧福地村生まれ。東北大文学部卒。八戸工大二高を経て、2001年より八戸工業大で勤務。人形浄瑠璃文楽などの伝統芸能や染織に関わる伝統文化、特に南部菱（ひし）刺しが研究テーマ。第３回インテリジェント・コスモス東北文化奨励賞を受賞。文楽はちのへ塾主宰。

私見創見 Monday

猛暑がやっと過ぎ去ったと思ったら、気付けばもう秋が深まっていた。菊花を浮かべたみそ汁の季節の到来だ。「菊慈童」の伝説の通り、古来中国では、不老長寿を願い、菊酒を飲む風習があったというが、わが家ではもっぱらみそ汁。熱い汁をすすり、菊の香りと南部の秋を心行くまで味わう。

さて、先日、撮影隊を組んで青森市まで遠征してきた。本年度、古い南部菱刺しを撮影して、古作写真集を作りたいと考えている。青森市教育委員会のご協力を得て、青森県有形民俗文化財「青森の刺しこ着」のうち、南部菱刺しの染織資料を撮影させていただいた。

県内の公的機関が所蔵する南部菱刺し・津軽こぎん刺し文化財の代表的なものは、青森県立郷土館「津軽・南部のさしこ着物」786点、三沢市「南部のさしこ仕事着コレクション」64点（いずれも国重要有形民俗文化財、国指定文化財等ベータベース参照）。

そして、「青森の刺しこ着」1014点（青森県庁ウェブサイト参照）である。民俗学者の田中忠三郎が収集し、青森市歴史民俗展示館稽古館が所蔵していたもので、2006年に稽古館が閉館した後は青森市教育委員会が保管・所蔵を行っている。このコレクションが最も点数が多く、こぎん刺し、菱刺し、つづれ刺し、サグリ（裂織着物）からなる。

菱刺し資料だけでも膨大な数である。前垂れ28点、着物123点、たっつけ（下衣、ズボン）86点、袖なし15点の中から、今回はえりすぐりの30点を撮影した。貴重な資料をたとう紙から1点ずつ取り出し、慎重に広げてセットして撮影するので、30点でも一日がかり。チーム一丸、汗だくになって作業を進めた。

「それ裏返しですよ」が菱刺し展示の〝あるある〟なのは、裏側も表と見まごうばかりに美しいからである。よって、もちろん、われわれも裏側、撮影しました！

「裏まさり」という言葉がある。江戸時代、奢侈（しゃし）禁止令の下、表地は地味な着物に豪華で派手な裏地を忍ばせるというオシャレ魂を指す言葉だが、菱刺しの場合にはもっと切実なものを感じた。着物やたっつけは、裏に一枚重ねて、二枚合わせの布を細かい針目で刺してあり、肌あたりが柔らかく暖かく、そして丈夫である。こうした丁寧な仕事には、着心地に対する鋭敏な感覚と着る人や布に対する思いやりがある。

たっつけの裏地には製作時代をほうふつとさせる古手木綿が使われていて、裏返すたび、スタッフから感嘆の声が上がった。会社名が染められているものがあり、スマートフォンで調べたら、福井県にある創業70年以上続く老舗繊維商社であった。「第八師団」と染められているものもあった。若い人がはいたのか、赤い布もある。さまざまな木綿地を絶妙に組み合わせた裏地パッチワークは、それだけで美しかった。

県伝統工芸品である南部菱刺しは、南部地方の伝統的な染織文化であり、農村の生活文化を示す民俗資料である。古作と呼ばれる明治・大正時代に製作されたとされる染織資料は、高度な刺し子技術と、色彩や模様などのデザイン的特色を現代に伝えている。

古作を見て、伝統的な手技や図案を製作、研究の参考にしたいという国内外の菱刺しファン、手仕事ファンの声は多い。しかし、これらの染織資料は、展示による劣化の問題もあり、ほぼ非公開のものが多く、博物館などで鑑賞できる機会は少ない。文化財の広範囲活用をどうすべきか、染織資料に関しても大きな課題である。何より、南部菱刺しの文化財コレクションが南部地方には「ない」という事実。南部地方に、八戸市内に「刺し子コレクションを！！」と切望する一人である。

まずは、今回の古作撮影と写真集製作に関して、来月23日に報告会を開催する予定である。ご興味のある方は、八戸市中心街にある八戸工業大の番町サテライトキャンパスまで足をお運びください。

※この記事・写真等は、デーリー東北新聞社の承諾を得て転載しています。